私の「チゴイネルワイゼン」

鈴木綾子

風が吹くたびに桜の花びらが窓に舞いかかり、やわらかな葉桜が見え隠れしていた。

あの日より十五年になる。当時、息子は二五歳、念願のグラフィックデザイナーになり、東京タワーに近いデザイン会社で、有名企業の専属として精力的に取り組んでいた。

入社三年目の春の夕べ、息子から電話があった。

「母さん、明日、入院することになった。病名を言うけど驚かないで。急性白血病らしい」

私は咄嗟に、明日一便の飛行機で東京に行くから、母さんが行ったら大丈夫！と答えたが、受話器を置くと膝が震え出した。旅行鞄に用意するものさえ浮かばない。

「お前がしっかりしないでどうする」

強い口調だった。夫は何も映っていないような目で、窓の外を見ながら、

「味わい深い人生になるぞ。章に感謝する時が来る。きっと来る」

私は味わい深い人生なんてどうでもよかった。とにかく誤診であってほしい、と願った。

医師からは、あと数日発見が遅れていたら命はなかっただろう。助かる道は骨髄移植しかないと言い渡され、すぐに抗癌剤治療が始まった。

中学高校と柔道で鍛えた息子の筋肉は逞しく、風邪をひいたこともないほど元気だった。

あの高校卒業式の帰り道、「ほんとに楽しい高校生活だった。母さんありがとう」と言った。希望の大学に入れず、東京の美大予備校に行くことになっていた。車内のＦＭラジオから女性の声のようなバイオリンの音色が流れてきた。

「ぼくこの曲好きなんだ。何ていう曲？」と言って私の顔を覗き込んだ。――サラサーテの「チゴイネルワイゼン」だった。

面会謝絶の個室で、息子の仕事の内容を聞いた医師は、病室にパソコンを入れて絵を描いたらどうかと、異例の許可を出してくれた。息子の瞳が黒く光った。抱えきれないほどの大きさの愛用のパソコンをベッドの横に置き、マウスを握った。何度も何度も描き直しながら、一枚のＣＧ（コンピューター・グラフィック）が完成した。

駿馬に跨って赤いマントをなびかせた、アルプス越えのナポレオンの勇士である。息子は額に入れて、病室の白い壁に掛けた。「不可能という文字はない」の名言に、「病気が治らないはずない」と自らを重ねるように、じっと眺めていた。その後、静物や花火、ふるさとの阿波踊りなどを、次々と描いていった。

息子より四歳年下で京都の大学に行っている娘に、息子の入院を伝えたとき、「その病気は骨髄がいるのよ。両親の合う確率は三％だけど、兄妹は二五％だから、私の骨髄が合えば全部お兄ちゃんに上げる！」と早口でしゃべった。私は言葉を失くした。

血液検査の結果、家族のＨＬＡ（白血球の型）はだれも合わなかった。だが息子は表情も変えず「母の日が来るけど、何もプレゼントができんよ。一歩も外へ出られんし」と言う。そして次に病院に行ったとき、「母さん、母の日のプレゼント！」と、小さな絵を手のひらにのせた。グリーンをバックに黄色いひまわりの花が四本、天空へ伸びていた。

血液病棟は子どもたちも大勢入院しており、息子は絵を描いてはプレゼントしていた。子どもたちのよろこびの声を聞くたびに、なお得意そうにパソコンに向かっていった。

抗癌剤の副作用で高熱が続いたり、指先まで痺れていたり、起き上がれない日もあったが、浮かんだイメージを横になったままデッサンし、気分がよくなるとマウスを握った。

徳島の私と、東京の息子を繋ぐのは、当時の重くて大きな携帯電話だった。

「母さん、太陽がいっぺんに五つ昇っ

た！」

――ドナーが五人見つかったのだ。骨髄手術の日を待った。緑の夏が来て、黄色い秋が過ぎた。手術日は一二月三日に決まった。医師より骨髄幹細胞をゼロにするための、抗癌剤と放射線治療の前処置の厳しさを知らされた。息子は医師の胸元を見つめていた。

「世界の有名なデザイナーも体験したことのない環境の中で、どんな絵が閃くかと思うとわくわくします」

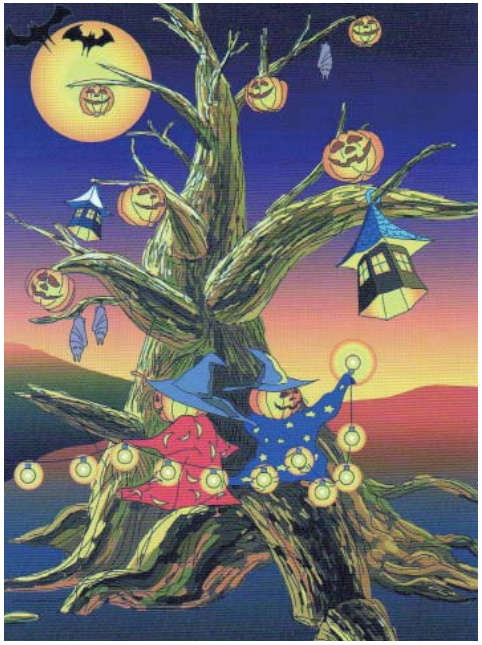
若い看護師さんの眼尻に、涙が溜っていた。

手術日の朝、娘と二人で無菌室の窓際に立った。息子の肩の筋肉は削げ落ち、腰は両手で回るほど細くなっていた。医師が両手で持ったポリ袋を、息子の前に差し出した。息子は手を合わせた。名も知らぬ二十歳の青年からいただいた骨髄……。点滴台に掛けられた牡丹色の骨髄液が、透明の細い管を通って息子の体内へ入っていく。その一滴、一滴に、祈りを込めた。

手術後五日目、パソコンの前に座ろうとしたが倒れた。少しマウスを握っては休み、また起きては描きながら二週間後、「母さん、できたよ」と、窓越しに掲げた絵は、夕日に照らされた枯れ木の大木に、ハロウィンの妖精二人が電球を灯していた。ドナーへの感謝と生きる喜びを表現したとのこと。「新しい命を」と題した。手術前と、画風が一変していた。

二六歳の誕生日も無菌室で迎え、一か月半の無菌室で五枚の絵が生まれた。どの絵にもハロウィンの妖精二人がいて、行きたい所、したいこと、夢見ることが、絵になった。

一九九八年二月、退院を前に、「個展を開きたいな。セレクトした四〇作品のポストカードを作ってチャリティバザーにして、お世話になった骨髄バンクに寄付したい」と言う。



家族みんなで大賛成した。新たな目標に向かっていけることが、うれしかった。

八月、徳島と東京の二会場で開催することになったが、六月に再び入

院。息子にとって再入院は、前回以上に死の恐怖が立ちはだかっていた。それでも息子の目は何かを求めるように生き生きと燃え、病気という宿命を使命に変えて創作に挑んでいた。

京都で就職していた娘から、「私の人生で、今、何が一番大事なことかを考えたの。仕事を辞めてきた。お兄ちゃんの世話に東京へ行く。個展も成功させてあげたいんよ」との電話。――ありがとう。後は声にならず、熱い固まりが喉をふさいでいた。一流ホテルの宿泊費以上の差額ベッド代と医療費に、私は仕事を休むことができなかったのだ。

八月、個展「生きるよろこび」は、徳島も東京も想像を超える入場者で大成功であった。その反響の模様を新聞各紙が取り上げてくれ、ＮＨＫ・ＢＳ放送が世界に紹介してくれた。

「鈴木さんにとって、絵を描くことの意味は何ですか？」

「ぼくにとって絵を描くことは、生きることです」

参加者から、「何年生きたかより、何人の人に感動を与えたかが大事ですね」など、身に余るメッセージをいただいた。祖父母にも会え、懐かしい同級生とも再会できた。

その二週間後、「母さん、すぐ来て！」の電話に、飛行機に飛び乗った。息子は肺炎に侵されていたが、息子と娘と親子三人で語り合った。息つく間もなく語り合った。

「病名を告知されて家に帰る時、道行く人がみな幸せそうに見えたよ」と、胸の内を吐露する。そして急に大きな声で、

「母さん分かった。今まで家族に心配をかけるのが辛かったけどそうじゃない。使命があって家族になったんだね。今度生まれ変わってもまた家族になれるね。うれしいなあ。家族の絆が深まったね」と言う。私は出そうになる嗚咽を必死でこらえた。

「ぼくの遺言と思ってメモして」と言われ、一瞬、顔が強張った私を見すごさず、

「ぼくは死なないよ。死なないけど書いて……。人間の幸せは、目先じゃないよ。もっ

と深いんだ。本当の幸せは、どんな境遇の中でも、希望を持ち続けて乗り越えていける心の中にあると思う。母さん、みんなに教えてあげて！」

「『……本当の喜びは、苦悩の大木に実る果実』と、ユゴーが言っているの。章は今、本当の喜びを味わっているね」と私は言った。黒い緞帳が垂れ下がってくるような病室で、生死の淵を超えて語り合える、不思議な、しかも神聖な空気に包まれた夜だった。

明くる日、徳島から主人が到着し、息子を抱きかかえた。「章、ようがんばったなあ。もうベッドに縛られることはない。自由に空を飛べるぞ！」と語りかける父親を、息子は今まで閉じていた瞳を大きく開けてじっと見つめていた。いつ息を引き取ったのかわからない最期であった。

一年後、アメリカ・ミネアポリスで開催された全米骨髄バンク総会に、日本代表として家族三人で招待された。息子の遺影と代表作品二〇点を抱えて太平洋を渡った。遺作展会場では二〇数カ国の人々が鑑賞してくださった。「作品は温かさと希望に溢れている。彼の生き方のように」などの感想をいただき、芸術に国境がないことをあらためて感じた。

以来、県内外で遺作展を開催してきた。現在は息子の絵と体験を通しての話を学校などから要請され、講演に行かせていただくことがライフワークの一つになっている。

私にとって味わい深い人生とは、「人のために尽くせるよろこび」だと思う。

柳の芽が吹き始めた頃、医師から外出許可が出て、銀座のパーラーに行ったことがある。

「ぼくが、死んだら、いつか、忘れ去られるね……」とさびしそうに目を伏せた。

「章の絵は永久に残るよ」と答えた。「チゴイネルワイゼン」の曲が静かに聞こえてきた。

今も、ジプシーの哀愁を湛えたこの旋律を聴くと、息子の悔しさと悲しみが共鳴して、胸が抉られる。そして憧れるように歌う2楽章、火花を散らして疾走する三楽章からは、無念さと感謝を、創作のエネルギーに変えて「生きる喜び」を絵に託した、息子の熱情が伝わってくる。